

東洋文庫

89

平凡社

今昔物語集

2

本朝部

永積安明
池上洵一 訳

ながづみやすあき

永積安明 明治41年山口県生。東京大学文学部国文学科卒（昭7）。神戸大学教授。専攻 国文学。主著『中世文学の成立』（岩波書店）、『中世文学の展望』（東京大学出版会）、『現代語訳『宇治拾遺物語 お伽草子』』（筑摩書房）など。現住所 芦屋市打出翠ヶ丘町19-10-404

いけがみじゅんいち

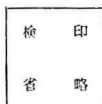
池上洵一 昭和12年岡山県生。神戸大学文学部国語国文学科卒（昭35）。熊本大学講師。専攻 説話文学。主論文「欠文の語るもの」（『文学』昭和39年1月号）、「今昔物語集の説話受容態度」（『法文論叢』21号）。現住所 熊本県大江2丁目6-35-4

今昔物語集 2 本朝部 [全6巻]

東洋文庫 89

昭和42年4月10日 初版発行

昭和46年7月1日 3版発行



訳者 永積安明
池上洵一

東京都千代田区四番町4番地

発行者 下中邦彦

発行所

郵便番号 102

東京都千代田区四番町4番地

振替・東京 29639

株式会社 平凡社

落丁・乱丁本はお
取替えいたします

印刷 東洋印刷株式会社

製本 石津製本株式会社

© 株式会社 平凡社 1967

0193-800892-7600

凡 例

- 一 本書の口語訳は、原則として意識を避け、できるだけ原文に忠実であることを心がけた。ただ直訳のままでは、現代文として成り立たぬ場合、あるいは文意をつくさなかったり、冗長にすぎたりする場合などには、たとえば句の順序をかえたり、主語・客語等を補い、または省くなどして意識したところがある。俗語的表現は、恣意に陥ることを恐れ、なるべくこれを避けた。
- 一 本文中□□により囲まれた空白部は、それに相当する部分が原本に欠脱していることを示す。
- 一 「」内の語句は、原本に欠脱している部分を、原本と同文的な類話（原則として『梅沢本古本説話集』・『宇治拾遺物語』等より以前に成立したと思われるもの）に限定し、それ以後の説話はとらなかつた）、あるいは確実な史料のある場合に限り、それらによって補ったものである。これらの典拠は、それぞれ巻末に注記した。
- 一 訳文中の人名・地名は原則として原文の表記のままとしたが、（ ）内に適宜補充して読者の便をはかったところがある。
- 一 平易な用語に訳しにくい難解な語句は、注記により、それぞれ簡略な説明を加えた。
- 一 和歌・詩文・経文は、原則として、本文中では原文のまま読み方を示すにとどめ、その大意を注として巻末に示した。

一 各説話の標目は、なるべく、原文の読みくだしに近く、口語訳することにとめた。

一 口語訳の原本には、岩波版日本古典文学大系本『今昔物語集』の本文を使用した。

一 本書巻頭の写真版は、神奈川県光明寺蔵、国宝『当麻曼茶羅縁起』のうち、臨終の際の弥陀の来迎を描いた一場面である。この絵巻は鎌倉時代の作であるが、本書に収めた『今昔物語集』巻第十五の、壮嚴な極樂往生の世界をしのぶすがにと、ここに掲げた。なお、十頁に挿入した写真版は、和歌山県道成寺蔵、国宝『道成寺縁起』の一場面である。

一 本書の口語訳にあたっては、前記の日本古典文学大系本のほかに、山岸徳平氏による校註日本文学大系本『今昔物語集』の頭注、長野誉一氏の日本古典全書本『今昔物語』等を参考にした。中でも山田孝雄・同 忠雄・同 英雄・同 俊雄四氏校注の日本古典文学大系本『今昔物語集』は、口語訳の原本としたばかりでなく、読み方・注解その他にわたって、多大の恩恵をこうむった。特に記して深甚の謝意を表したい。

目 次

卷第十四 本朝・仏法

- 無空^{むくう}律師^{りつし}を救うために枇杷^{びわ}の大臣法華^{だいじんぽうわ}を写す語第一
 信濃^{しんののかみ}守、蛇と鼠とのために法華^{ぽうわ}を写してその苦を救う語第二
 紀伊^{きい}国の道成寺の僧、法華^{ぽうわ}を写して蛇を救う語第三
 女、法華^{ぽうわ}の力により蛇身を転じて天に生まれる語第四
 野干^{こぎつね}の死後を救うために法華^{ぽうわ}を写す人の語第五
 越後^{えちご}国の国寺の僧、猿のために法華^{ぽうわ}を写す語第六
 修行僧、越中^{えちゅう}の立山に至り若い女に値^あう語第七
 越中国の書生の妻、死後立山^{りつさん}の地獄に堕ちる語第八
 美作^{みささか}国の鉄掘^{てつくわ}り、穴に入り法華^{ぽうわ}の力によって穴から出る語第九
 陸奥^{むつ}国の壬生^{みぶのよし}良門、悪を捨てて善に趣^{おもむ}き法華^{ぽうわ}を写す語第十

橘敏行、願をおこして冥途より帰る語第二十九	九
大伴忍勝、願をおこして冥途より帰る語第三十	一〇
利荊女、心経を誦して冥途より帰る語第三十一	二
百済の僧義寛、心経を誦して靈験を施す語第三十二	三
僧長義、金剛般若の験により盲の眼を開く語第三十三	四
壹演僧正、金剛般若を誦して靈験を施す語第三十四	五
極楽寺の僧、仁王経を誦し靈験を施す語第三十五	六
伴義通、方広経を誦させて聲を開く語第三十六	七
方広経を誦させて父の牛となるを知る語第三十七	八
方広経を誦する僧、海に入り死ぬことなくて帰り来る語第三十八	九
源信内供、横川において涅槃経を供養する語第三十九	一〇
弘法大師、修円僧都と挑む語第四十	一一
弘法大師、請雨経の法を修して雨を降らす語第四十一	一二
尊勝陀羅尼の験力により鬼の難を遁れる語第四十二	一三
千手陀羅尼の験力により蛇の難を遁れる語第四十三	一四
山の僧、播磨の明石に宿り貴い僧に値う語第四十四	一五
調伏の法の験により利仁將軍の死ぬ語第四十五	一六

卷第十五 本朝・仏法

元興寺の智光・頼光、往生の語第一

元興寺の隆海律師、往生の語第二

東大寺の戒壇の和上明祐、往生の語第三

薬師寺の濟源僧都、往生の語第四

比叡山の定心院の僧成意、往生の語第五

比叡山の頸の下に瘤ある僧、往生の語第六

梵釈寺の住僧兼算、往生の語第七

比叡山の横川の尋静、往生の語第八

比叡山の定心院の供僧春素、往生の語第九

比叡山の僧明清、往生の語第十

比叡山の西塔の僧仁慶、往生の語第十一

比叡山の横川の境妙、往生の語第十二

石山の僧真頼、往生の語第十三

醍醐の観幸入寺、往生の語第十四

比叡山の僧長増、往生の語第十五

比叡山の千観内供、往生の語第十六

二三

二二

二一

二〇

一九

一八

一七

一六

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

〇九

〇八

〇七

法広寺の僧平珍、往生の語第十七	一四〇
如意寺の僧増祐、往生の語第十八	一四一
陸奥国の小松寺の僧玄海、往生の語第十九	一四三
信濃国の如法寺の僧葉蓮、往生の語第二十	一四四
大日寺の僧広道、往生の語第二十一	一四六
雲林院の菩提講を始めた聖人、往生の語第二十二	一四七
丹後国の迎講を始めた聖人、往生の語第二十三	一四九
鎮西に千日講をおこなう聖人、往生の語第二十四	一五三
摂津国の樹上の人、往生の語第二十五	一五五
播磨国の賀古の駅の教信、往生の語第二十六	一五五
北山の餌取の法師、往生の語第二十七	一五八
鎮西の餌取の法師、往生の語第二十八	一六二
加賀国の僧尋寂、往生の語第二十九	一六五
美濃国の僧葉延、往生の語第三十	一六六
比叡山の入道真覚、往生の語第三十一	一六八
河内国の入道尋祐、往生の語第三十二	一七〇
源 愍、病により出家し往生の語第三十三	一七二
高階良臣、病により出家し往生の語第三十四	一七三

高階たかしな成順入道、往生の語第三十五

小松天皇の御孫の尼、往生の語第三十六

池上の寛忠僧都の妹の尼、往生の語第三十七

伊勢国いせの飯高郡いだけのの尼、往生の語第三十八

源信僧都の母の尼、往生の語第三十九

睿桓聖一人みかみの母の尼に釈妙しやくみょう、往生の語第四十

鎮西の筑前国の流浪の尼、往生の語第四十一

義孝少将、往生の語第四十二

丹波中将雅通、往生の語第四十三

伊予国いよの越智益躬おちのますみ、往生の語第四十四

越中えちゅう前司藤原仲遠のなかとお、兜率とそつに往生の語第四十五

長門国ながとの阿武大夫あむの、兜率とそつに往生の語第四十六

悪業をつくる人、最後に念仏を唱えて往生の語第四十七

近江守彦真おうみのかみげんしんの妻伴氏とものうじ、往生の語第四十八

右大弁藤原佐世ふじわらのすけよの妻、往生の語第四十九

女の藤原氏ふじわらのうじ、往生の語第五十

伊勢国いせの飯高郡いだけのの老嫗、往生の語第五十一

加賀国かがの□郡の女、往生の語第五十二

一七五 一七六 一七七 一七八 一七九 一八〇 一八一 一八二 一八三 一八四 一八五 一八六 一八七 一八八 一八九 一九〇 一九一 一九二 一九三 一九四 一九五 一九六 一九七 一九八 一九九 二〇〇 二〇一 二〇二 二〇三 二〇四

近江国の坂田郡さかたのの女、往生の語第五十三

仁和寺の觀峰かんほう威儀師いぎしの従ともの童わらわ、往生の語第五十四

卷第十六 本朝・仏法

三五

僧行ぎやうぜん善、觀音の助けにより震旦しんだんより歸り来る語第一

二五

伊予国いよのの越智直おちのあたし、觀音の助けにより震旦しんだんより歸り来る語第二

二六

周防国すおうのの判官代、觀音の助けにより命なからを存たもてる語第三

二八

丹後国たんごのの成合なりあひ觀音の靈驗れいけんの語第四

三一

丹波国たんばのの郡司ぐんじ、觀音の像を造る語第五

三四

陸奥国むつの鷹取りの男、觀音の助けにより命なからを存たもてる語第六

三七

越前国えちぜんのの敦賀つるがの女、觀音の利益りやくを蒙る語第七

三〇

殖槻寺うゑつきの觀音、貧女を助け給う語第八

三八

女人、清水しみずの觀音に仕つかえまつり利益を蒙る語第九

四三

女人、穗積寺ほすむねの觀音の利益を蒙る語第十

四七

觀音の落ちた御頭、自然に繼つがれる語第十一

四九

觀音、火の難のがを遁のがれるために堂を去り給う語第十二

五〇

觀音、人のために盜まれて後自ら現あらじ給う語第十三

五〇

二〇六

二〇七

御手代みてしろのあずまひと東人、観音を念じて富を得ることを願う語第十四

観音に仕つかえまつる人、竜宮に行き富を得る語第十五

山城国やましろのの女人、観音の助けにより蛇の難を遁れる語第十六

備中国びつちゅうのの賀陽良藤かやのよしふじ、狐の夫となり観音の助けを得る語第十七

石山の観音、人を利して和歌の末を付ける語第十八

新羅しらの後、国王の咎とがを蒙り長谷の観音の助けを得る語第十九

鎮西より上京の人、観音の助けにより賊の難を遁れて命を持つ語第二十

鎮西に下向の女、観音の助けにより賊の難を遁れて命を持つ語第二十一

啞むの女、石山の観音の助けにより物を言う語第二十二

盲人、観音の助けにより眼まなこを開く語第二十三

錯あやまって海に入る人、観音の助けにより命なごらを存える語第二十四

島に放たれた人、観音の助けにより命を存える語第二十五

盗人、箭やを負い観音の助けにより当たらず命を存える語第二十六

観音の助けにより寺の錢を借り、自然に償つぐなう語第二十七

長谷はつせに参る男、観音の助けにより富を得る語第二十八

長谷の観音に仕つかえまつる貧しい男、金の死人を得る語第二十九

貧しい女清水きよみずの観音に仕えまつり、御帳みちようを賜たまはる語第三十

貧しい女清水の観音に仕えまつり、金こがねを賜たまはる語第三十一

二五

二四

二二

二四

二六

二七

二七

二八

二八

二九

二九

二九

二九

二九

二九

二九

二九

二九

二九

隱形 おんぎよう の男、六角堂の観音の助けにより身を顕 あ わす語第三十二	三四
貧しい女、清水の観音に仕えまつり助けを得る語第三十三	三八
無縁の僧、清水の観音に仕えまつり乞食の婿となり便りを得る語第三十四	三二
筑前国 ちくぜんの の人、観音に仕えまつり浄土に生まれる語第三十五	三四
醍醐の僧蓮秀、観音に仕えまつり活 よすが ることを得た語第三十六	三五
清水 しみず に二千度参詣の男、双六 すうろく に打ち入れる語第三十七	三七
紀伊国 きのの の人、邪見不信により現罰を蒙る語第三十八	三九
招提寺 しやうだいじ の千手観音、盗人 あ に値 い ひ辞 いな んで取らせぬ語第三十九	三二
十一面観音、老翁に交じて山崎の橋柱 はしばしら に立つ語第四十	三二

今昔物語集 2

本朝部

永積安明
池上洵一
訳

卷 第十四 本朝・仏法

無空律師を救うために枇杷の大臣法華を写す語第一

今は昔、比叡山に無空律師むくうりつしほという人がいた。幼くして比叡山に登って出家して後は、戒律を犯さず、また、心も正直で道心が深かった。だから、僧綱そうこうの位にまで昇ったけれども、ついに現世での栄華・名声を永久に捨て去って、ひとえに後世の菩提を願ひ、比叡山に籠もってひたすら念仏を唱えて怠らず、これを一生の間の勤めとしていた。また、常に衣食に乏しく、なにも頼りにするものがなかった。まして、僧房には一塵の貯えもあるはずがない。

さて、律師はふとした機会に一万銭を得た。その時に、律師は、自分が死んだ時、没後のいとなみのために弟子たちが必ず迷惑することだろう。だから、この銭のことを人に知らせないで隠しておいて、葬式の費用にあてよう。ただ臨終にあたって弟子たちに教えてやろうと思ひ、僧房の天井の上にこっそり隠しておいた。その後、弟子たちは少しもこのことを知らずにいた。そのうち、律師は病氣にかかり、悩みわずらっているうちに、この銭を隠しおいてあることを忘れて、弟子たちに知らせないまま死んで